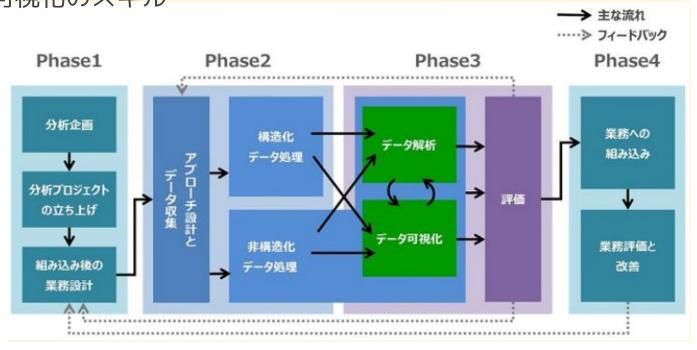
Week4 Pythonによるデータ可視化 (Matplotlib)

講師・スライド作成:中内

今回学ぶのは<u>探索的データ分析(EDA)</u>のスキルセットの一部としての データ可視化のスキル



https://www.ipa.go.jp/jinzai/itss/itssplus.html

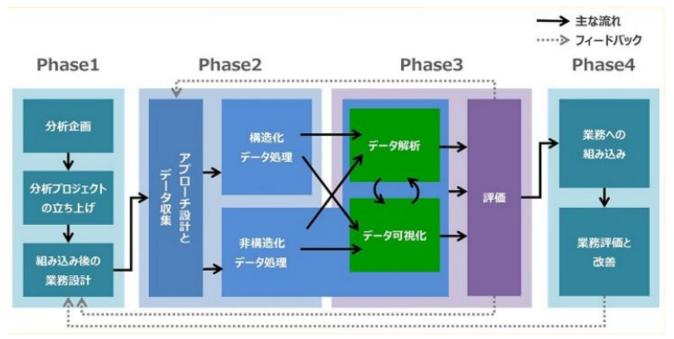
探索的データ分析(EDA)

- データセットに適宜<u>前処理を施しつつ</u>様々な統計量を抽出して<u>可視化し</u>、そこに内在する<u>特性・パターン・偏り</u>について探索的に仮説立案・検証を繰り返して分析すること
- 「探索的」であることが重要であり、必然的に<u>「試行錯誤」</u> <u>を重ねる</u>ことになる
- ①理論やドメイン知識などの事前知識を活用した仮説立案 と、②バイアスを排した特徴観察の両方が重要(知的好奇心も大事)

探索的データ分析(EDA)

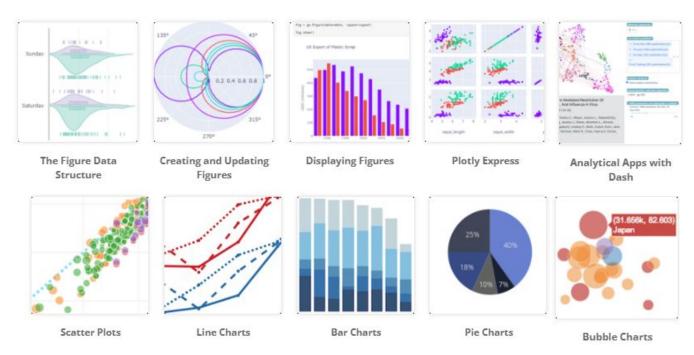
- データサイエンスの文脈では、データ可視化の知識は一義的には**EDAを効果的に行うための**スキル
- これとは別に「<u>コミュニケーションスキルとしての可視化</u>」 という必要性もあるが、これと「<u>EDAとしての可視化</u>」では 若干考え方や必要なスキル構成要素が異なることに注意すべ き

- 可視化することで、クライアント企業に提起すべき課題を**自分が発見できる**
- 可視化することで、クライアント企業に課題を<u>伝える</u>ことができる
- 各フェーズでそれぞれの可視化が必要



https://www.ipa.go.jp/jinzai/itss/itssplus.html

データ可視化



https://plotly.com/python/

Pythonにおけるデータ可視化では 主にMatplotlibというライブラリを使う



matplotlibには2つの異なるインターフェイスがある

matplotlib

【概要】

matplotlibの本体

【特徴】

グラフの各部位を逐一定義していく方法を とっている

【長所】

非常に細かいところまで図を調整できる 図の逐次的な変更がしやすい

【短所】

pyplotよりも多くのパラメータを指定する必要がある

matplotlib.pyplot

【概要】

元々は<mark>簡易版的</mark>な位置づけ (※MATLABに近似させたインターフェイスという側面もある)

【特徴】

試行錯誤的なグラフ作成に適している

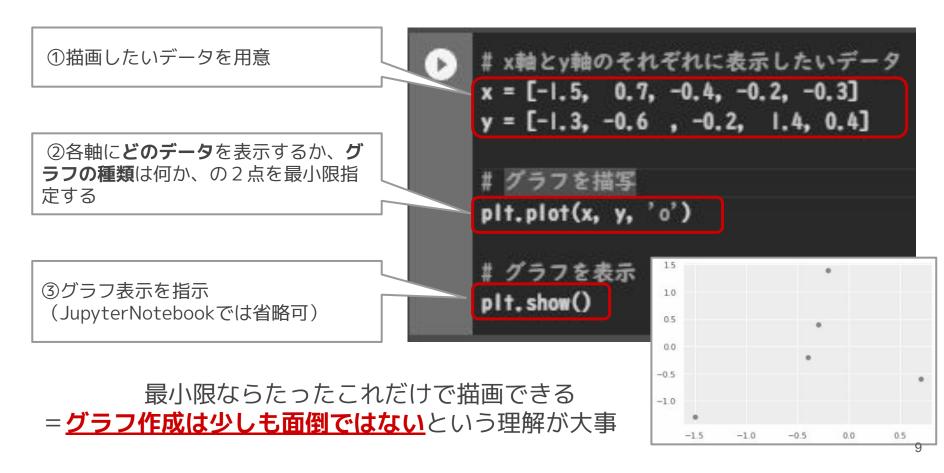
【長所】

細かいパラメータの指定なしに短いコード でも使える

【短所】

極端に細かい作り込みをしたい時に制約が生じる可能性がある

最も手軽には<u>数行で</u>グラフ化できる(matplotlib.pyplot)



最も手軽には<u>数行で</u>グラフ化できる(matplotlib.pyplot)

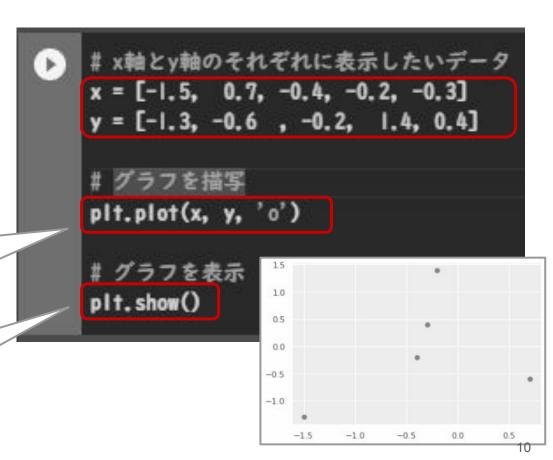
次のようにモジュールをインポートしておく

import matplotlib.pyplot as plt

グラフを描画する関数 plt.plot()

x軸, y軸のデータを引数に渡す

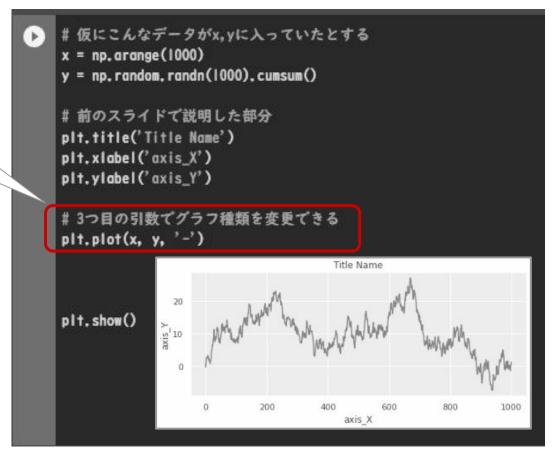
グラフを表示する関数 plt.show()



マーカーを変更する

3つ目の引数に指定する記号 ('-'の部分)によってグラフの マーカーを簡単に変更できる

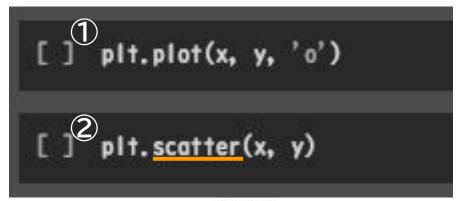
'o'		散在	区团			
Ų		折れ線グラフ				
		その	つ他数	十種	類	
axis Y	٠,		Title N	lame		• •
	0	5	10 axis	15 X	20	25

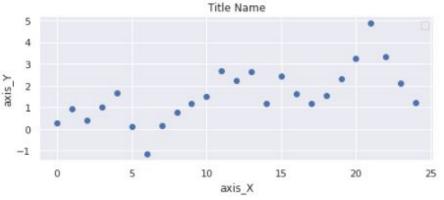


marker	symbol	description	пзп	*	star	8 (CARETLEFTBASE)	•	caretleft (centered at base)
" , "	•	point	"h"	•	hexagon1	9 (CARETRIGHTBASE)	•	caretright (centered at base)
" "	ŵ	pixel	"Н"	•	hexagon2	10 (CARETUPBASE)		caretup (centered at base)
"o"		1	"+"	+	plus	11 (CARETDOWNBASE)	_	caretdown (centered at base)
	<u> </u>	circle	"x"	×	х	and the second s		
"V"		triangle_down	"X"	*	x (filled)	"None", " " or ""	8	nothing
"A"	A	triangle_up	"D"	•	diamond	'\$\$'	f	Render the string using mathtext, E.g "\$f\$" for marker showing the letter f.
"<"	•	triangle_left	"d"	•	thin_diamond	verts		A list of (x, y) pairs used for Path vertices.
">"	•	triangle_right	" "	1	vline			The center of the marker is located at (0, 0) and the size is normalized, such that the
"1"	Y	tri_down	" " " " " " " " " " " " " " " " " " "	-	hline	created path is cell.		created path is encapsulated inside the unit cell.
"2"	٨	tri_up	0 (TICKLEFT)	_	tickleft	path A Path instance.		A Path instance.
"3"	~	tri_left	1 (TICKRIGHT)	_	tickright			A regular polygon with numsides sides,
"4"	>	tri_right	2 (TICKUP)	Ţ	tickup			rotated by angle.
"8"		V10000 7000	3 (TICKDOWN)	Ĭ	tickdown	(numsides, 1, angle)		A star-like symbol with numsides sides, rotated by angle.
	<u> </u>	octagon	4 (CARETLEFT)	4	caretleft	(* *
"S"	-	square				(numsides, 2, angle)		An asterisk with numsides sides, rotated by
						一の種類を簡単に	参照で	きる
	os://matp		a/stable/ap	<u>oi/mark</u>	ers api.h	<u>ntml</u>		
"P"	*	plus (filled)	7 (CARETDOWN)	~	caretdown			12

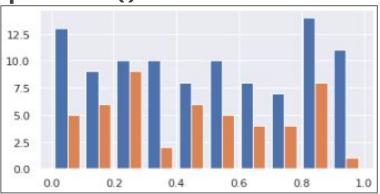
グラフの種類ごとに用意された関数を使う

- 前のスライドでは右図①の方法で グラフの種類を指定した
- 更にさまざまなグラフ種類を試したい場合は、②の方法で指定することもできる
- ②の方法の場合、「scatter」の部分を様々なグラフの名前に置き換えることで多様なグラフを使い分けられる

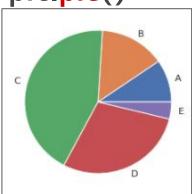




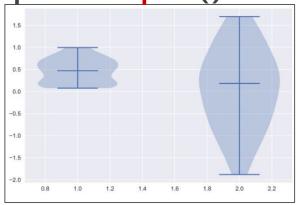
plt.hist()



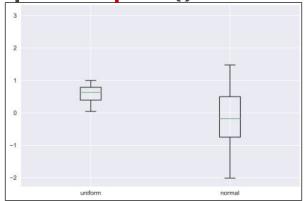
plt.pie()



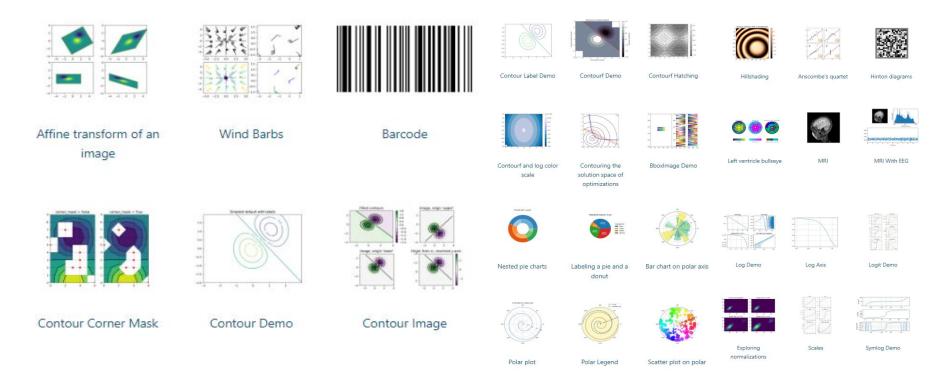
plt.violinplot()



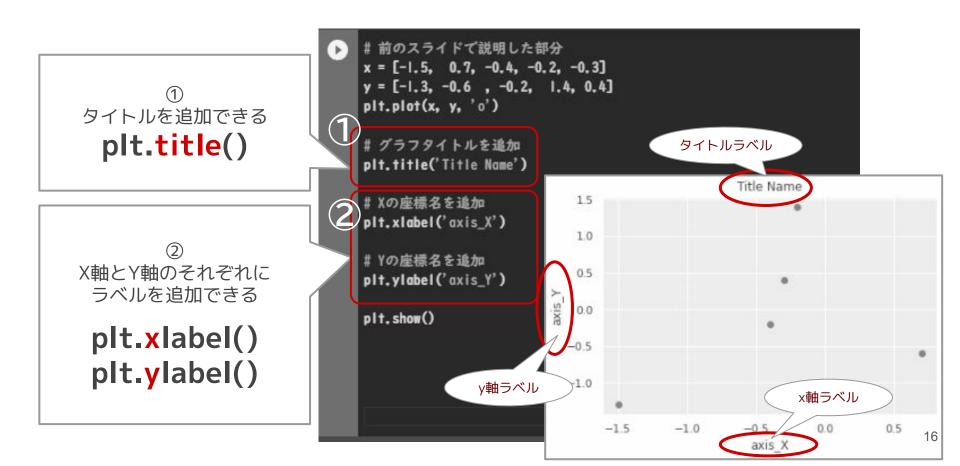
plt.boxplot()



グラフの種類は無数にあるので公式ドキュメントなどを 適宜参照しながら使い分ける



タイトルラベルと軸ラベルを追加する



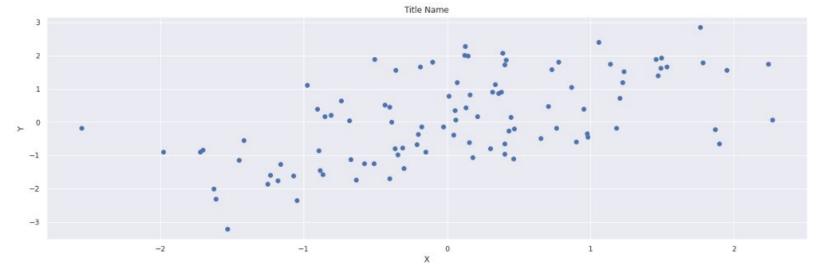
凡例とグリッド線を追加する

①plt.plotの引数「label=」で グラフラベルを指定した上で… # グラフのラベルを、plot関数の引数「label=」で指定できる plt.plot(x, y1, label='product1') plt.plot(x, y2, label='product2') # 凡例を追加する ②凡例を追加できる plt.legend() plt.legend() plt.grid(True) product1 product2 revenue ③グリッド線を追加できる plt.grid() 引数はブール値(True or False)で渡す 200 1000 time

グラフの大きさを変更する

plt.figure(figsize=({x軸の長さ}, {y軸の長さ}))

(例) plt.figure(figsize=(20, 6))



文字の大きさを変える(フォントサイズの変更)

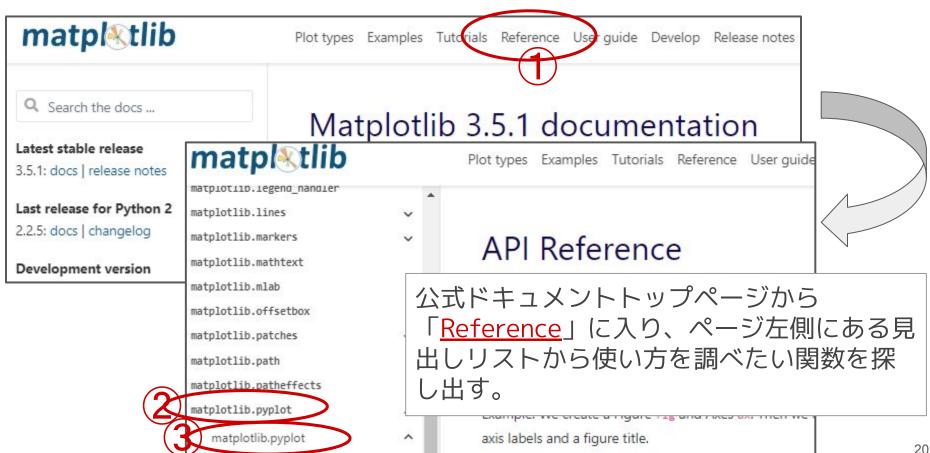
各ラベルはいずれも引数に fontsizeを指定することで文字 の大きさを変更できる

フォントサイズだけではなく、 色、書体、その他細かい調整も 可能

細かい点は覚えるのではなく調べ 方を身につける

```
# グラフタイトル
plt.title('Title', fontsize=20)
# x軸ラベル
plt.xlabel('X label', fontsize=20)
# y軸ラベル
plt.ylabel('Y label', fontsize=20)
# x軸の目盛
plt.xticks(fontsize=20)
# y軸の目盛
                       目盛に関する関数
plt.yticks(fontsize=20)
#凡例
plt.legend(fontsize=20)
```

公式ドキュメントの見方



matplotlib.pyplot.acom

公式ドキュメントの見方

見出し。住所のように「matplotlibの中のpyplotの中のxlabelという関数について」という構成になっている

どんな引数を指定できるかが()の中に示されている

各引数の詳細説明領域

どんなデータ型で入力すべきかや、どのような選択肢が用意されているかなどが書かれている

その他様々な関数と共通のパラメータ。 (フォントサイズのようなラベルの外観に関わる ものは<u>Text properties</u>を参照するよう記載 されている。)

```
matplotlib.pyplot.xlabel
matplotlib.pyplot.xlabel(xlabel, fontdict=None, labelpad=None, *,
                                                                               [source]
 Loc=None, **kwaras)
     Set the label for the x-axis.
      Parameters:
                         xlabel : str
                              The label text.
                         labelpad : float, default: rcParams["axes.labelpad"] (default:
                         4.0)
                              Spacing in points from the Axes bounding box including ticks
                              and tick labels. If None, the previous value is left as is.
                         loc : {'left', 'center', 'right'}, default:
                         rcParams["xaxis.labellocation"] (default: 'center')
                              The label position. This is a high-level alternative for passing
                              parameters x and horizontalalignment.
      Other Parameters: **kwargs: Text properties
                              Text properties control the appearance of the label.
```

Text properties

https://matplotlib.org/stable/api/text api.html#matplotlib.text.Text

フォントを調整するための共通の パラメータが全て記載されている (膨大な項目数がある)

例えば前のスライドで示した引数の 「fontsize」はここに説明を見つけるこ とができる

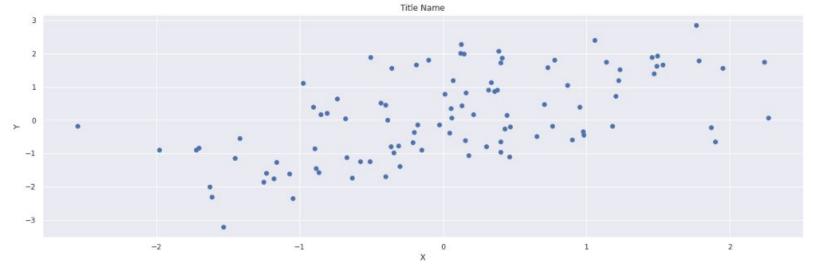
Property	Description					
agg_filter	a filter function, which takes a (m, n, 3) float array					
	and a dpi value, and returns a (m, n, 3) array					
alpha	scalar or None					
animated	bool					
backgroundcolor	color					
bbox	dict with properties for patches.FancyBboxPatch					
clip_box	unknown					
clip_on	unknown					
clip_path	unknown					
color OF C	color					
figure	Figure					
fontfamily or family	{FONTNAME, 'serif', 'sans-serif', 'cursive', 'fantasy',					
	'monospace'}					
fontproperties or font or	font_manager.FontProperties OF str OF pathlib.Path					
font_properties						
fontsize or size	float or {'xx-small', 'x-small', 'small', 'medium', 'large'					
	'x-large', 'xx-large'}					

グラフの大きさを変更する

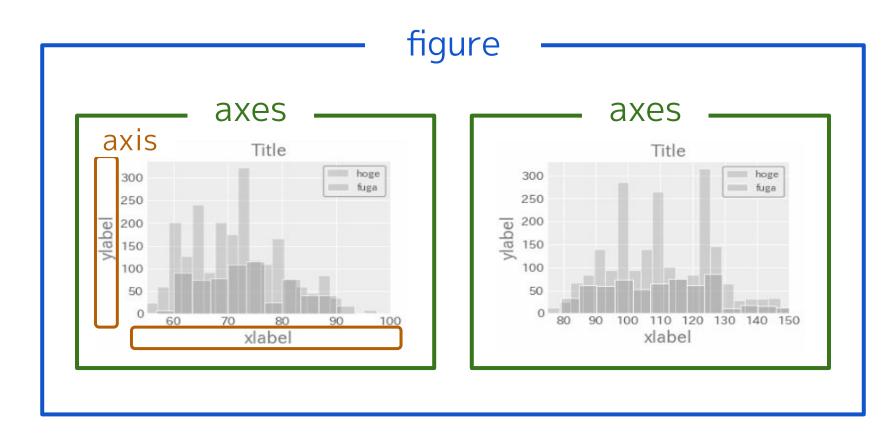
再掲

plt.figure(figsize=({x軸の長さ}, {y軸の長さ}))

(例) plt.figure(figsize=(20, 6))



グラフを構成するfigureとaxesを理解する



複数のaxesを持つグラフ

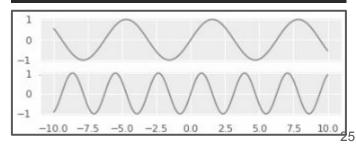
先ほどはグラフサイズの指定という文脈で紹介したが、この関数は「<u>Figureの新規作成</u>」が本来の機能 (1つしかFigureを作らない場合は省略可)

Figureのなかに複数のAxesを作成する関数 カッコの中に3つの引数が並んでいる。意味は次のとおり。

plt.subplot(2, 1, 2)

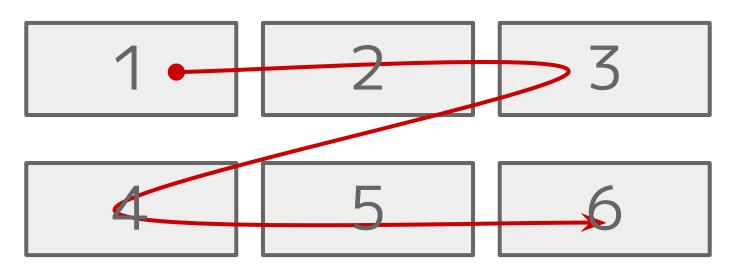
縦に2行、横に1列のAxesのうちの2つ目

```
# グラフの大きさを指定
    plt.figure(figsize=(20, 6))
    # 2行|列のグラフの|つ目
(2)
    plt. subplot(2, 1, 1)
    x = np.linspace(-10, 10, 100)
    plt.plot(x, np.sin(x))
    # 2行|列のグラフの2つ目
3
    plt. subplot(2, 1, 2)
    y = np.linspace(-10, 10, 1000)
    plt.plot(y, np.sin(2*y))
    plt.grid(True)
```



axesの番号と位置の並び方

plt.subplot(2, 3, n)

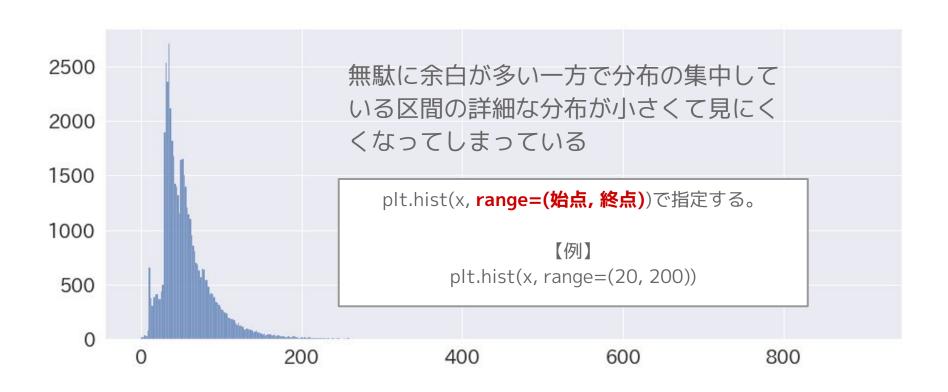


MatplotlibとSeabornの関数の違い(データ指定の仕方)

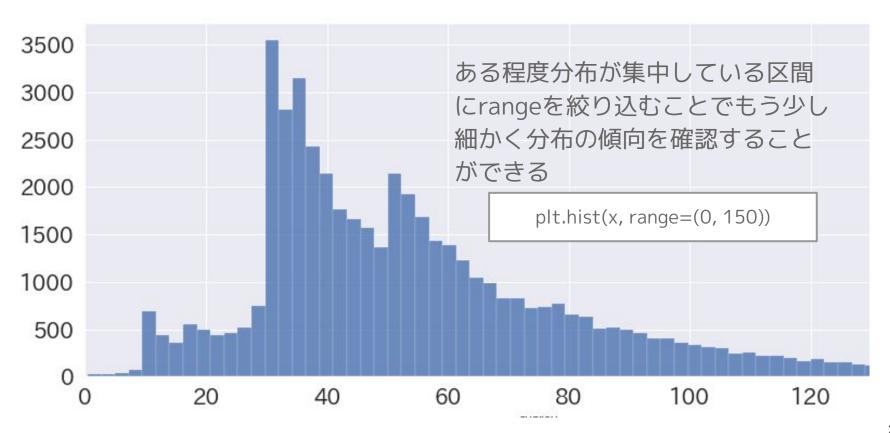
```
【Matplotlibの書き方】(pyplotも同じ/一応Seabornもこの書き方でもOK)
plt.scatter(x = df['sepal length'], y = df['petal width'])
x軸のデータの指定
y軸のデータの指定
【Seabornの書き方】
sns.scatterplot(data=df, x='sepal length', y='petal width')
データセットの指定
x軸のカラム名の指定
y軸のカラム名の指定
```

SeabornでもMatplotlibと同じ書き方が一応できるが、引数「data」にデータセットを指定したうえで、引数x・yにはカラム名だけを書くスタイルの方がSeabornではより一般的な書き方(こちらの方が応用が効きやすいため)。

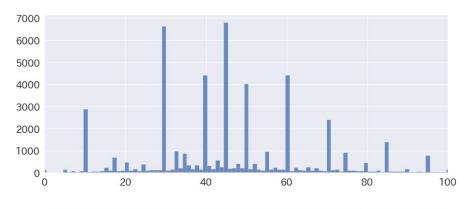
引数rangeの指定をしなかった例



引数rangeの指定をした場合

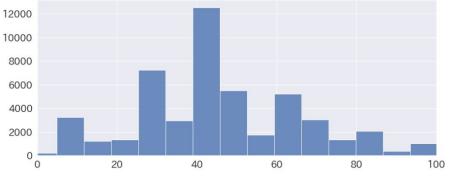


ビン切りを変えてデータを観察する



ビンを細かく切った場合

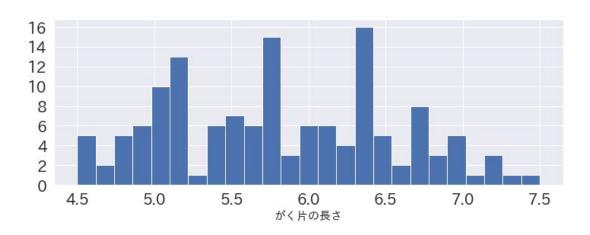
- 局所的に分布の集中している区間を発 見できる場合がある
- 全体像としての傾向が掴みにくくなる



ビンを大まかに切った場合

- 全体的な傾向を把握しやすい
- 局所的に生じている特異的な分布は見 えなくなる

ビン切りを変えてデータを観察する



引数「bins」に整数型の値 を渡して、区間をいくつで 切るか指定する。 plt.hist(x, **bins=**{ビン切りする数})で指定する。 【例】 plt.hist(x, bins=25)

グラフごとに引数もたくさんあるので調べながら使う

matplotlib.pyplot.hist

```
matplotlib.pyplot.hist(x, bins=None, range=None, density=False,
weights=None, cumulative=False, bottom=None, histtype='bar', align='mid',
orientation='vertical', rwidth=None, log=False, color=None, label=None,
stacked=False, *, data=None, **kwargs)
```

全て覚える必要はどこにもなく、必要に応じて調べて使う

棒グラフをつくる関数 plt.bar()

plt.bar()で**棒グラフ**を指定

引数のalignは棒グラフを<u>X軸のどこに合わせる</u> <u>か</u>を指定するもの

'center': バーの中心をxtickに合わせる

'edge': バーの**左端**をxtickに合わせる

※バーの**右端**をxtickに合わせる場合は'edge'を

選択した上で、widthに負の数を指定する。

plt.xticks(), plt.yticks()

x,yの各軸の**目盛り**のパラメータを指定 第一引数に<u>目盛りを入れる位置</u>の値のリスト、 第二引数に目盛りラベルをリストで指定

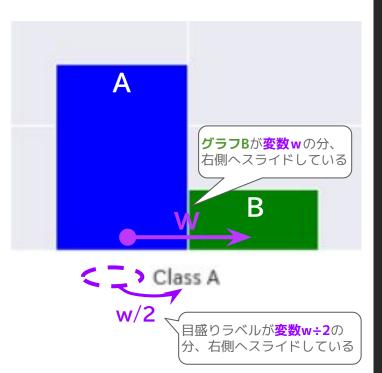
```
# 表示するデータ
x = [1, 2, 3]
y = [10, 1, 4]

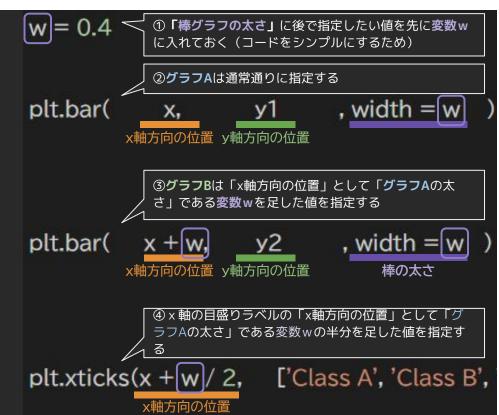
plt.bar(x, y, align='edge', width = 0.5)

# 棒グラフそれぞれのラベル
plt.xticks(x, ['A Class', 'B Class', 'C Class'])
```

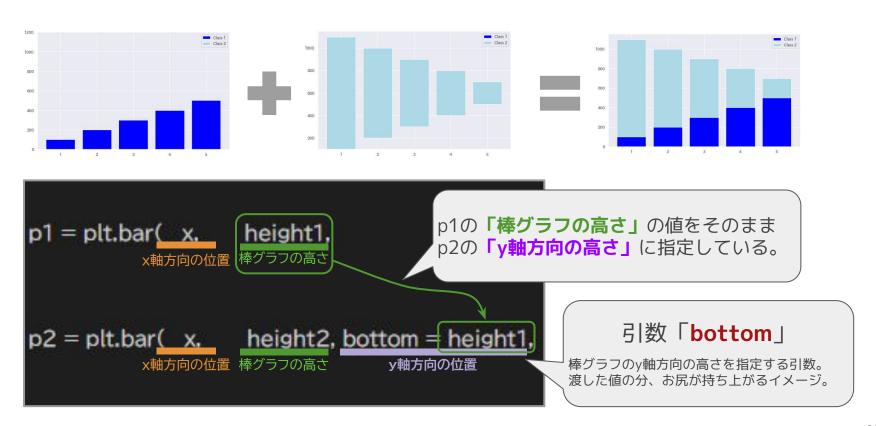


棒グラフの応用:比較棒グラフ





棒グラフの応用:積み上げ棒グラフ



円グラフの作成:plt.pie()

【使い方】

表示をしたい要素の順に値 を入力したリストをそれぞ れの引数に渡して使う。

【主な引数】

X

各要素の値

label

各要素に表示する文字列

colors

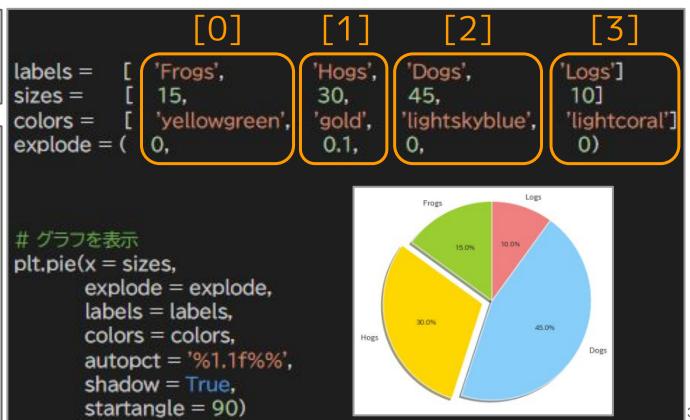
各要素の色

explode

各要素を中心からどの程度 離して表示するかの値

startangle

要素を並べる起点の位置を 角度で指定する(「O」に指定す ると3時の位置が起点になる)



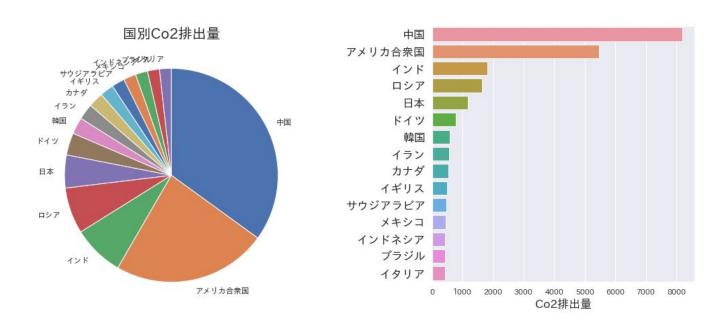
円グラフは使い方に注意が必要



円グラフを使うことそれ自体に対して 賛否両論があることだけは頭の片隅に いれておく

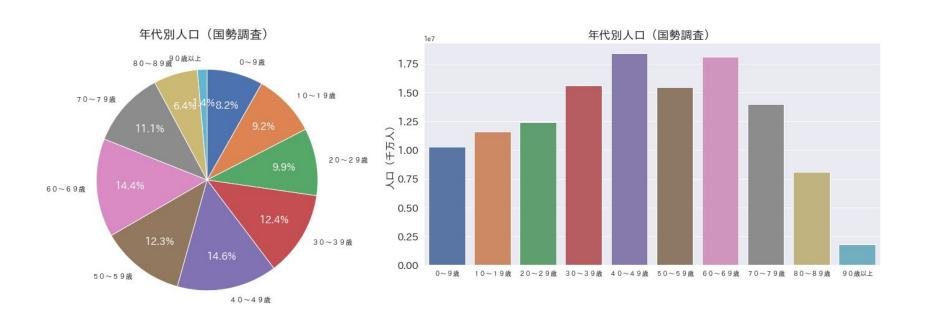
> ※「使うべきでない」という指摘は、例えば 松本健太郎『グラフをつくる前に読む本』、技術評論社、2017など

円グラフは使い方に注意が必要



- 支配的なシェアを持つ要素が存在することを目立たせる効果はある
- でも棒グラフでも同じことは把握できる(プレゼンならともかくEDAなら棒グラフの方が簡単に作れて良い)
- 円グラフはちょっと要素数が多いだけでラベルが潰れるなどして調整に無駄な手間がかかる

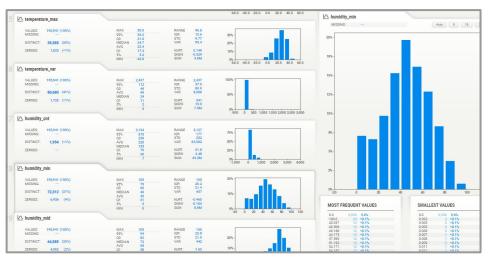
円グラフは使い方に注意が必要

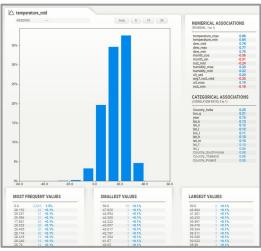


- 円グラフは支配的なシェアの要素がない場合は漫然とした印象になりやすい。
- 棒グラフに比べて円グラフでは要素間の差が直感的に把握しにくい。

EDA自動化ライブラリの例: Sweeting

https://github.com/fbdesignpro/sweetviz



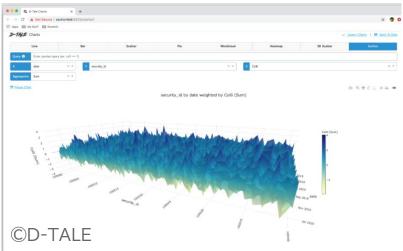


EDA自動化ライブラリの例:



https://github.com/man-group/dtale

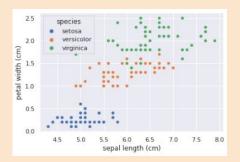




量的データと質的データ

量的データ

四則演算に意味がある数値データ (金額・時間・年齢etc.)



連続値も離散値も含む

質的データ

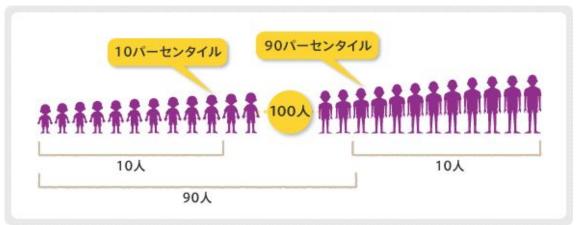
カテゴリや性質を表現するための データで四則演算に意味がない

(性別・状態区分・ある事柄への該当有無etc.)



「Medu(母親の学歴区分)」などは数値型なので四則演算できないこともないが、分析上の意味はもたない

パーセンタイルと要約統計量の把握



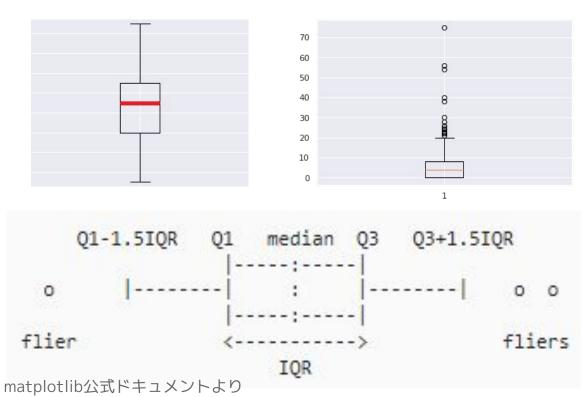
全体を100として小さい方から数えてn%目にくる値

```
# 要約統計量
student_data_math['absences'].describe()
         395,000000
count
           5.708861
mean
           8.003096
std
           0.000000
min
25%
           0.000000
50%
           4,000000
75%
           8,000000
          75.000000
max
Name: absences, dtype: float64
```

Pandasの.describe()メソッドで他の統計量と併せて一括算出できる

四分位数と箱ひげ図

箱の下底	第1四分位 25パーセンタイル
箱内部の赤い線	第2四分位 50パ°-センタイル 中央値
箱の上底	第3四分位 75パーセンタイル
ひげの端	四分位範囲(IQR) の1.5倍
フライヤーポイン ト	四分位範囲(IQR) の1.5倍を超えた 外れ値

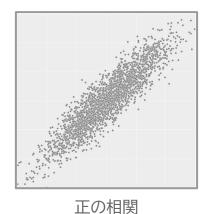


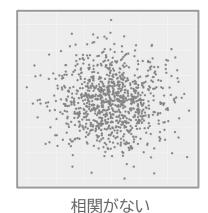
https://matplotlib.org/stable/api/ as gen/matplotlib.pyplot.boxplot.html

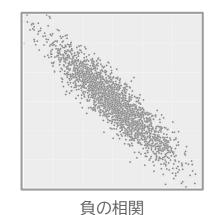
相関係数の性質

- -1~1までの値を取る
- 正の相関が強いと 1に近づく
- 負の相関が強いと-1に近づく
- 0に近いほど相関が弱い

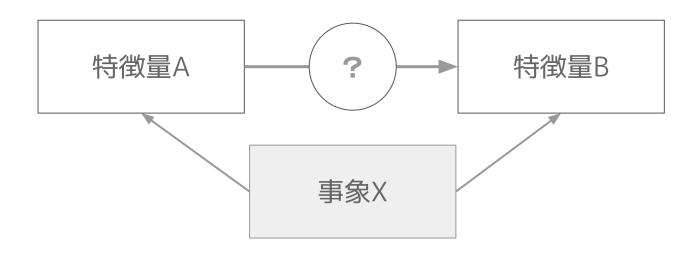
- 一方の値が変化すると他方の値も変化 するような連動性を表現する係数
- 因果関係があるかないかは定義外





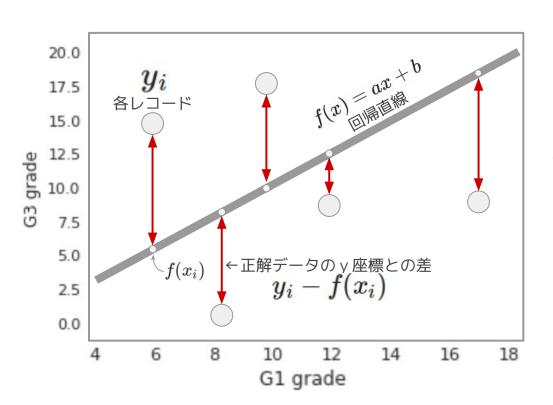


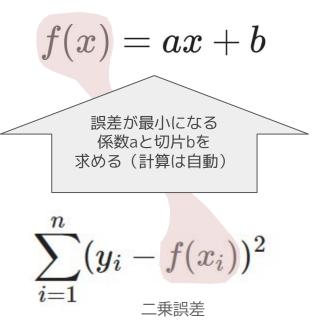
相関関係は因果関係とは異なる



- 特徴量AとBの間に強い相関があっても、別の要因が双方に作用している可能性もある
- 偶然である場合もある
- 因果関係は係数で手軽に求められるものではなく、ドメイン知識も使いながらの丁寧な考察が必要

最小二乗法による単回帰分析







①まず、Scikit-learnパッケージから、使いた いモデルが属するモジュールをインポートす る。(コード上では「sklearn」という名前なの で注意)

②Scikit-learnには線形モデル以外にも様々な 種類もモデルが用意されており、これらは次週 詳しく学ぶ。

[] from sklearn import linear_model

線形回帰のインスタンスを生成

reg = linear_model.LinearRegression()



learnによる単回帰分析

[] from sklearn import linear_model

線形回帰のインスタンスを生成

reg = linear_model.LinearRegression()

この部分はモジュール名。この配下に複数の関数が用意されており、ドット以降に使いたい関数名を書く。

※以下のようにモジュールではなく使いたい関数を 直接importして使っても良い。

from sklearn<u>.linear model</u> import <u>LinearRegression</u> reg = LinearRegression()

- ①機械学習モデルを作成する関数(コンストラクタ)
- ②コンストラクタにより左辺の変数(ここでは「reg」) に機械学習モデルのインスタンスが格納される。
- ③後続する各種処理はこのインスタンスに対し て行う。

インスタンスはメソッドやインスタンス変数で活用する



Step1

モデル別のコンストラク タ関数で機械学習モデル を作成

線形回帰のインスタンスを生成
reg = linear_model.LinearRegression()



Step2

fitメソッドで**学習** 説明変数と目的変数を引 数に渡す (ここではXとY)

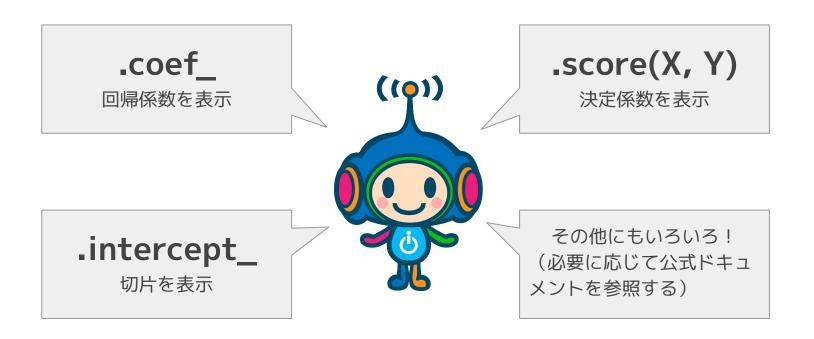
予測モデルを計算、ここでa,bを算出 reg.fit(X, Y)



Step3

predictメソッドで**予測** (予測させたいデータを 引数に渡す # 予測したいデータを読み込ませて予測させる reg.predict(test_data)

単回帰モデルの主なメソッド&インスタンス変数



Scikit-learnは各ライブラリの中でも特に公式ドキュメントが見やすい。 →積極的に公式の情報を参照するのがおすすめ。